

アルベール・カミュ 「ペスト」を読む

2018-6

実存主義

サルトルと同時代 戦後知識界の最大のスター

哲学者、小説家

世界には、目的とか、生きていることに意味がない、と考える
しかし如何に生きべきかに応えている

異邦人、シーシュポスの神話、ペストなど

不条理の哲学を打ち立てていた。

ペスト、1947年発表(中世に流行った伝染病、ペスト)

アルジェの港町オランにペストが発生する

この様子を 身分を明かさないうり手が 仔細に記述した形をとった小説

ここでの不条理との闘いをえがいた

カミュ代表作であり、カフカの変身(個人的な不条理)などとともに不条理文学
と呼ばれる

戦争と言う不条理、社会的な不条理、ペストは集団的な不条理にどう対応した
かを描いた



ストリー

アルジェリアの港町オラン、4月16日

医師ベルナール・リュ、ペストにかかったネズミの死体を見る

結核を患った妻の看護で頭がいっぱい

翌日、町ではネズミの話で持ちきり、10日後には8000のネズミの死体がかたづけられた

町は得体のしれない不安に包まれる

リュウのアパートの門番も高熱と痛みの病に襲われ、息を引き取る

先輩医師カステルが訪ねて来る

信じられないが、それはペストだと

オランという街、実在、→フランスの金儲けの場所

1830年からフランスの植民地、北アフリカアルジェの第二の都市、人口20万人
地中海に面した港町、貿易の中心地

人々は金儲けにしか興味がなく、文化よりも商売や物質的な繁栄が重んじられている

登場人物

医師のリュウ

新聞記者のランベール

旅行者のタルー

下級役人、小説家グラン

密売人のコタール

医師会の会長のリシャール

イエズス会の信父パヌール

物語

曖昧な状況の認識に対して、しっかりとペストであるとの認識を持って対応すべきだが

一時的に改善したが

突如、総督府からペストの事態を宣言し、市を封鎖し、市民を隔離せよと
全ての交流禁止、孤立化へ

ペストによってオラン市は追放状態になった

もともと人間は追放状態にあるもの→ペシミスティック

人間は、ペストのような何かが起こると人生の問いに否応なく直面する→むき出しになる

→本来の追放状態を知ることになる

市民は追放状態の自覚がなく、お祭り状態、日常が続くものと思ってしまう。

異常事態を過小評価し一時的と思ってしまう→心理的なメカニズム

慣れる、状況に慣れてしまう強さ、鈍感さの危機

抽象→ランベールの言葉、感情的

あなたが語っているのは、理性の言葉だ。

あなたは抽象の世界にいるのだ→抽象とは、理念と非現実的な災厄の意味

抽象→リュウ

抽象と戦うためには、多少抽象に似なければならぬ→理念という非現実で対抗するしかない

ペストが、世界の否定性を呼び起こす

神なき世界で戦う人々

完全に孤立するオランの街

パヌールの説教

何か禍の中にいる、その罪でこうなった、深く反省すべきだと

旅行者ジャン・タルー→保健隊に、グランも加わる、事務の要、ささやかな仕事で役に立ちたい

→リュウに問う→神を信じているか→、見極めること→果てしなき敗北に抗う
一体何が君をそうさせる

リュウが→タルーに問う→倫理→理解することです。→モラル、行動様式を意味する

ランベール→コタール(密売人)と脱出を試みる→失敗

保健隊に加わらない理由→戦争に参加したトラウマ→コタール、観念のためには死ねない→愛するものために生きて、死ぬること

ペストと戦う唯一の方法→誠実さ、職務を果たすこと。高邁な理念ではない。

保健隊で働きたい

絶望になれてしまう市民

ペストの猛威は超天に

感情の起伏をもたず、絶望になれる、は絶望よりひ悪い

彼らには現在しかない、時間の奴隷

カミュ→アルジェリアに生まれ、追放される、→新聞記者、ナチスレジスタンス

カミュは不条理に抗って小説(書く、表現をする)を書いた。

コロナ禍 カミュ ペストを読む

2020-6

突然、私たちに降りかかったコロナ禍、未知のウィルスと、どう向き合えばいいのか。

その手がかりを探ろうと世界中の人々が手にする古典がある。

「人生は自分でコントロールできないことばかり。だから苦しい」「人は内面にも葛藤や矛盾といった不条理を抱いている」

「救いは、小説の登場人物たちの闘う姿」の中に

いま、アルベール・カミュ「ペスト」が話題になっている。

著者のアルベール・カミュ(1913年から60年)は「異邦人」でも知られるフランスの作家で、「不条理の文学」を打ち立てた。

57年にノーベル文学賞を受賞。

その背景には父親の戦死や貧乏、結核の発症といった体験があるとされる。

「ペスト」を47年に発表。

ペストにみまわれた町の人々の奮闘と連帯を描いた。

この70年も前の本がコロナ禍の今と重なると反響を呼び、世界的なベストセラーに。

日本では2月以降、36万4千部も増刷された。

舞台はフランス領アルジェリアのオラン。

経済が重視され「金持ちになるため」に人々は働いている。

だが、ペストの感染拡大で町は閉鎖され「同じ袋の鼠」となり、自宅への流刑に遭遇した。

商業は「死」に、観光旅行は「破滅」する。

欧米のロックダウンや日本の緊急事態宣言下で起きたことを連想させる。

パンデミック小説としても読めるし、

「時代を超え、読み次がれているものは、ペストをあらゆる不条理の象徴として、カミュが意図的に書いたから」と指摘される。

第二次世界大戦の生々しい記憶が残っている出版時、

フランスではペストをナチス・ドイツと重ね、占領への抵抗の物語として読まれた。

日本での出版は50年で、「当時の日本人も戦争体験を投影して読んだのではないか」とされる。

大江健三郎は著書「ヒロシマ・ノート」の中で、原爆について「炸裂した瞬間、人間の悪の意志の象徴となった」とし、「現代の最悪のベスト」と記した。

ベストが示すのは戦争や疫病、飢餓、災害、専制政治、内面に巣食う悪など、人類から自由や命を奪う不条理の全てで、繰り返されるものだ。

戦後、日本でも高度成長に伴う公害、北朝鮮による拉致、バブルの崩壊、過労死など様々な理不尽な出来事に見舞われてきた。

だから、「時代ごとにふさわしい読み方があると東日本大震災の際には、災害や放射能の脅威をベストに重ね合わされた。

コロナ時代を生き抜く上で学べる事は何か。「凡庸ながらも役に立とうとする主要人物たちの言動にヒントがある」のではないか。

登場人物の医師リュウは、ベストと戦うための方法は「誠実さ」と言い、職務の治療に専念する。

理性を信ずるタルーは、「(誰もが)ベスト持っている」として、他人に感染させないのは「気を緩めない人間」だと言う

こうした姿勢から導き出されるのは、「新型コロナを自分の問題として引き受け、他人に判断を委ねず、自分で考え、行動することです」

それは手を洗う、マスクをする、人混みを避ける、といった当たり前の行動も含む。

「自分のできることを丁寧にする。それによってヒーローになるわけではないが、コロナ時代に求められる行動規範だ」

小説ではベストは収束し、町は歓喜に湧く。

一方、カミュは「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもない」と記す。

新型コロナ感染の第二波、第三波が懸念される中、一人ひとりの誠実さが問われている。

再 ペストを読む

2020-6

不条理って言う言葉に惑わされなく、読むんで見る。

1940年代のフランスの領土

アルジェリアのオランの町

6p フラグ1を立てる、上京演出

そこに住む人たちがいかに働き、いかに愛し、いかに死ぬか、その方法は静かに調べることで

この小説の描かれ方を知る

フィクションですが作者はそれを創作している

この世界で起こることを徹底的に観察している、っていう感じの小説なんですね、

10p

記録作者、歴史家は必ず資料というものをもっている

本編、4月16日 医師リュウは、一匹の死んだ鼠につまずく

普段いそいもないところ、不穏な状況に気づく

17日、門番が、いたずらで鼠の死体3匹を置いていかれた、と訴える

リュウの妻、病氣中→山の診療所へ車で立つ

「くれぐれも気を付けて、、」

しかし、妻にかけて言葉が届かなかった

死んだ鼠を抱えた駅員が通った

25p →フラグ3 ついに人間にも

門番が、操り人形のように難儀そうに歩いてくる、

人間に発症か？

34p

門番は、死んでしまう

オラン到着の日からのジャン・タルーの手帳が記され →困難な期間の特殊な記録

感染症が広がっている様子が窺える

フラグ4

だんだん、怪しい状況が明るみになってきた

→ 死亡例が多発する

カステル 以前、こんな光景を見たことがあると
しかし、世論は、病名をつけることはしなかった →市民は忠誠なんだ
誰でも知っているあの病名なのに、そして、

ついにペストという言葉が発せられた →ためてためて、フラグ、演出
72p

ペストと呼ぶか、知恵熱と呼ぶかは重要でなく

76p

混乱を避けるため 予防措置を取るべきだ →社会の動きのリアルさを演出

81p

知事が公令を出す

ペスト地区を宣言、町を閉鎖せよ！

2 章

この瞬間から、全てのものの事件となった →断絶

手紙もダメ、電報はいい

断絶状態に 98p

ペストがもたらしたものは、

一つは、変えるきっかけ 101p

新たに見つめ直す機会であった

妻や恋人に最大の信頼を置く男は、嫉妬深く、愛情に軽薄、→だが誠実さを
取り戻した

母親の不安や表情に対する息子たちも

二重の苦しみを知る

人間性を取り戻す

何が大事かを知るきっかけとなる

街頭は、にぎ合うが

商業が死んで、観光も破滅

103p 市民の憂うべき出来事に

114p オドロオドロシイ都市封鎖

リュウの 130p 診断の意味することは

病人を隔離すること

疲弊、疲労するリュウ

161p 同情、不安すら感じない状況 →つやっぽく描いている

コタール 犯罪人は、ペストを喜ぶ

それは、刑務所では犯罪人も刑務員も同じ立場におかれるから

253p

観察から外れ、つやっぽい文章で描く

後半

リュウ 治療から診断することへ

ランベール 町に留まり

状況外しの、、、演出 →少年の死

予期せぬ反転へ →血清が届く

ペスト禍が去って

p372 独白する

友情の記念に海水浴へ

普通に鼠の出現に喜び

勝利の証は大きな数字 →統計

手帖、観察の記録の種明かし

タルーは、ペストに罹患し、死んでしまう

ペストは、人々に、知識と記憶を残すだけ、、

最後に

多くの死に直面したが

病気に勝利する市民、喝采

しかし、危ないペスト菌は死んでない →ホラー映画のよう

ペスト禍は不幸をもたらすが希望ももたらす → エンタメ的

観察文とはいえフィクション

取材、記録文に対する深い考察がある

何を発見し、大切にすべきか、を提示している

人間はなかなか賢くならない。

不条理という言葉にあまり頼らない方がいい。理由は

「不条理」にカテゴライズしないで

特殊にジャンル化し、他人事になってしまう。

折角の素晴らしい読書体験が他人事になってしまう。

こうした姿勢から導き出されるのは、「新型コロナを自分の問題として引き受け、他人に判断を委ねず、自分で考え、行動することです」

それは手を洗う、マスクをする、人混みを避ける、といった当たり前の行動も含む。

「自分のできることを丁寧にする。それによってヒーローになるわけではないが、コロナ時代に求められる行動規範だ」

小説では、ペストは収束し、町は歓喜に湧く。

一方、カミュは「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもない」と記す。

新型コロナ感染の第二波、第三波が懸念される中、一人ひとりの誠実さが問われている。

折角の素晴らしい読書体験が他人事になってしまわないように
実人生とリンクして実体験を深めよう！！